

若者・中年・高齢者のもつ認知症高齢者の認識 「認知症高齢者への対応」による構造比較

谷田恵美子

Recognition to elderly person, middle age, and young person's Dementia Elderly

Emiko TANIDA

要 旨

認知症高齢者に関する調査を2008年に実施、若者、中年、高齢者を比較した。イメージした認知症高齢者の年齢はどの世代とも76～80歳が4～5割と多く、状況は「2. 時折、会話が通じる」が約4割であった。「認知症高齢者への対応」について、高齢者は17すべての項目で規制容認の傾向があった。4因子に分かれた「認知症高齢者への対応」を構造化し、平均値および影響力（標準化推定値）を比較した。

1. 三世代とも「財産管理」や「不動産管理」で大きな影響力があった。特に中年で影響力が強い。認知症高齢者はお金の管理や不動産管理が十分ではなく、本人のみならず家族の生活基盤を揺るがす大きな経済問題であると考えられる。
2. 高齢者は若者や中年にくらべ「点滴中縛る」、「怪我予防のために縛る」や「運転を中止」で大きな影響力があった。いずれも生命に関係する項目である。高齢者は規制を強要してでも、命を守りたい、安全を優先したい思いが強いと考えられる。
3. 若者・中年は高齢者にくらべ「徘徊に鍵をかける」や「外出を防ぐため鍵をかける」に関して大きな影響力があった。若者、中年は認知症高齢者の行動規制について関心が強く、高齢者が思うほど規制しなくても良いと考えている。高齢者は社会規範を守りたい思いが強い傾向がある。

キーワード：認知症老人への対応、世代比較、共分散構造分析、老人・中年・若者

Key words：Care on dementia elderly person, Generation comparison, Covariance structure analysis, Elderly person, middle age, and young person.

はじめに

今後、日本では長寿・老年人口の増加が予測されている。それにともなって後期高齢者の増加、認知症高齢者の増加が予測されている。認知症高齢者のために政策には、介護予防や介護保険などさまざまな取り組みがなされている。認知症患者が安心して暮らせるためのボランティアである認知症サポーターやキャラバン・メイト（認知症サポーター養成講座の講師役）を養成している^{注1)2)}。2009年5月には100万人のサポーターが登録されている。

これらの認知症に関する啓蒙活動は、人々の認知症高齢者に対する認識を変化させていると考えられる。そこで、本研究は、若者・中年・高齢者がもつ認知症高齢者への認識を明らかにする。

研究のデザイン

研究目的：若者・中年・高齢者がもつ認知症高齢者への認識を明らかにする。

調査対象：自己記入できる高齢者、中年、若者（大学生から）

調査内容：①基本属性等

②「認知症高齢者への対応」17項目
四肢択一、思う1点～思わない4
点（点数が低いほど規制容認、点数
が高いほど規制反対）

研究方法：アンケート調査。留め置き、後日回収。
無記名、個人特定できない配慮、自由
意志、自己記入。

調査員 ①調査の了解の得られた調査員（学生）
に、身近な各期、男女各2名を依頼
②調査前に1時間のオリエンテーショ
ンを実施。

調査期間：2008年7月～9月

倫理的配慮：意図、利用の限定、統計処理し、個
人不特定を文章で説明し、了解を得た
者のみに実施依頼。

分 析：ソフト Spss、Amos（共分散構造分析
による構造化）

認知症高齢者の認識：認知症高齢者は認知の障害
をもち、虐待や金銭の搾取等生活基盤や尊厳が脅か
されやすい。日常的におこる痴呆高齢者との「いき
ちがい」に注目し、「痴呆高齢者の尊厳」に関する
主要15項目に関する質問紙（2001年）を作成した。
すでに、三世代（2001年9月）に調査、介護経験の
ない若者127人、中年132人、高齢者120人と介護
経験者129人、ケアワーカー（2003年3月）に調査し、
ケアワーカー253人との比較を試みた。平均値か
ら高齢者は拘束や強制を肯定する傾向が強く見られ
た。ケアワーカーの日頃の思いでは拘束や強制を否
定する傾向が見られたが、困ったケースの場合では
やや肯定的な傾向に移行していた。構造化（共分散
構造分析）による比較し、〔財産管理〕と「不動産
管理」、「貯金の管理」では強い因果関係が見られた。
介護経験者は「日常の対応」と「外出禁」、「暴力縛」
とで、ケアワーカーは「床出禁」、「暴力縛」とで因
果関係が強く見られた。高齢者、介護経験者は「危
険予防」と「怪我予防に縛」とで因果関係が強かつ
た。すなわち、介護経験者や高齢者は安全確保、ケ
アワーカーはトラブル回避が強い¹⁾。

ケアを意識して「痴呆高齢者の対応」の基本姿勢
20項目を作成（2003年）し、2003年3月ケアワー
カーに調査、253結果を分析（共分散構造分析）した。
〔不動産の管理〕と貯金等の管理との因果関係が同
様に強い。特に、困ったケースでは「暴力に縛る」、
「ベッドから出さない」で、「トラブル予防に鍵」と
の因果関係が強く、拘束はしかたがないと考えてい
た。ケアワーカーを議論タイプと従順タイプに分け
比較すると、議論タイプでは話ができない痴呆高齢
者にはさっさと「話を中断」し、従順タイプでは「徘徊に鍵」、
「睡眠薬の服用」の傾向が見られた。勤務
年齢6年未満と以上を分け比較すると、未満では「暴
力に縛る」で因果関係が強く、否定的な傾向が見ら
れた²⁾。

高齢者に「生活満足度」12項目と「認知症高齢
者の対応」18項目を2005年9月に調査、高齢者
182人を分析した。高齢者は今の生活に満足し、認
知症高齢者への対応は規制・抑制傾向が強い。パス
図では「生き方と生活」、「危険予防」に集約され、
その源である「豊かさ」や「日常性」にも目を向け
ていくことが重要である³⁾。

さらに、前期高齢者105人、後期高齢者77人に
分け、分析した。平均値で比較すると、前期高齢者
は日常的な「火の取り扱い」、「話の中断」、「貯金の
管理」、「点滴」などで規制・抑制の傾向が強く、後
期高齢者は「財産」、「契約」、「買物」、「プライバシー」
などで規制・抑制を肯定する傾向が見られた。構造
化による比較では、前期高齢者では「安全」、後期
高齢者では「生命」、「安全」とで因果関係が強かつ
た。前期高齢者では「火の取り扱い」、「会話」などの日
常的な項目で、後期では「生命」、「プライバシー」、「お
金」や「不動産」など生命・生活基盤に関する項目
でより因果関係が強かつた。すなわち、前期では日
常的な項目、後期では生活基盤に関するものが影響
していた⁴⁾。

結 果

調査は 2008年7月～9月に実施し、配布516、
回収は461（89.3%）であった。回収した調査は欠
損を除いた456（98.9%）であった。

1. 調査対象者の背景

若者 153 人（平均年齢 21.5 歳 ± 3.5）、中年 150 人（49.3 歳 ± 5.1）、高齢 153 人（74.9 歳 ± 5.6）であった（表 1）。調査員の関係から調査対象者は西日本で分散していた。高齢者は二人暮らし（高 35.9%・中 9.3%・若 1.3%）・一世代（高 41.1%・

中 10.0%・若 5.9%）が多く、中年・若者は四人家族（高 9.8%・中 32.7%・若 37.9%）で、二世代（高 23.5%・中 60.0%・若 58.2%）が多い傾向が見られた。

2. 認知症高齢者の世話の経験

認知症高齢者の世話の体験の有無を尋ねた（表 2）。世話の体験は 456 人中 120 人(26%)であった。

表 1 調査対象者の背景

		若 者	中 年	高 齢 者
人	合計 (456)	153	150	153
平均年齢 (標準偏差)		21.5 歳 (3.57)	49.3 歳 (5.16)	74.9 歳 (5.65)
年齢範囲		18-39 歳	40-64 歳	65-87 歳
男	48.5%	49.0%	48.7%	47.7%
女	51.5%	51.0%	51.3%	52.3%
住居地 学生は実家を記入	岡山県	26.8%	23.5%	26.8%
	他中国	24.8%	17.4%	16.3%
	四 国	29.4%	36.9%	36.6%
	九 州	3.3%	3.4%	3.9%
	近 畿	13.7%	16.8%	15.0%
	その他	2.0%	2.0%	1.3%
住居地の規模	1. 都市 100 万以上	9.8%	4.7%	5.2%
	2. 中都市 15 ~ 100 万人	30.1%	36.0%	24.2%
	3. 小都市 15 ~ 5 万	33.3%	27.3%	30.7%
	4. 郡部 5 万未満	26.8%	32.0%	39.9%
家族人数	1 人	3.3%	2.7%	7.8%
若×高 ***	2 人	1.3%	9.3%	35.9%
中×高 ***	3 人	9.8%	16.7%	17.6%
	4 人	37.9%	32.7%	9.8%
	5 人	26.1%	16.0%	9.2%
	6 人	7.8%	10.7%	12.4%
	7 人	11.1%	9.3%	6.5%
	8 人	0.7%	2.0%	0.7%
	9 人	1.3%	0.7%	0.0%
	平 均	4.59 人	4.33 人	3.43 人
世代と一人暮らし	一世代 (一人暮らし)	5.9% (4.6%)	10.0% (2.7%)	41.1% (7.8%)
	二世代	58.2%	60.0%	23.5%
	三世代	30.1%	26.0%	26.8%
	四世代	2.7%	2.0%	2.6%
	無答	3.3%	2.0%	5.9%

t 検定 ***<.001

表 2 認知症高齢者の世話体験

		有	無	無 答
若 者	n=153	22.2	74.5%	3.3%
中 年	n=150	29.3	70.7%	
高 齢 者	n=153	32.7	67.3%	4.6%

表3 世話の程度

世話の程度	1. 主に世話をした		2. そばで手伝った				3. ときたま手伝った		
若者 n=34	9人 (26.5%)		12人 (35.3%)				13人 (38.2%)		
中年 n=44	11人 (25.0%)		11人 (25.0%)				22人 (50.0%)		
高齢者 n=43	16人 (37.2%)		8人 (18.6%)				19人 (44.2%)		
介護期間と対象	無答	平均期間 (～期間)	父母	曾・祖父母	配偶者	その他	患者等	利用者・入所者	
若者 n=31	0人	1年2ヶ月 (～3年)	1	10	0	1	5	14	
中年 n=36	8人	3年5ヶ月 (～25年)	13	16	0	3	3	4	
高齢者 n=41	2人	3年4ヶ月 (～15年)	25	8	2	5	1		
介護程度	1. 常に見守りが必要		2. しばしば		3. 時たま		4. ほとんど不要		無答
若者 n=34	29.43%		32.4%		35.3%				2.9%
中年 n=44	31.8%		38.6%		20.5%				9.1%
高齢者 n=43	32.6%		30.2%		27.9%				9.2%
トラブル	1. 多い		2. しばしば		3. 時たま		4. ほとんどない		無答
若者 n=34	20.6%		23.5%		23.5%		17.6%		14.7%
中年 n=44	9.1%		29.5%		34.1%		22.7%		4.5%
高齢者 n=43			14.0%		25.6%		53.5%		7.0%

若者は2割、中年・高齢者3割程度があった。世話では、おおよそ4～5割が時たま手伝い、2～3割が主に世話をしていた(表3)。介護の対象を見ると、高齢者は父母を、中年は父母、曾・祖父母を、若者は利用者・入所者、曾・祖父母を介護していた。常時見守りが必要な人が3割(高29.4%・中31.8%・若32.9%)であった。

三世代とも同じような介護傾向を示しているが、トラブルに関して、高齢者はほとんどないが53.5%で、若者は多いが20.6%と多い。高齢者は上手に認知症高齢者と付きあっているのではないかと考えられる。反対に、若者は認知症高齢者の行動に目くじらを立てながら接している様子が考えられる。

世話をした中で、一番困ったことを尋ねた(表4)。認知症高齢者の症状に関する内容、介護負担が記載してあった。「地獄」、「人権を優先したケアどころではない」に代表される介護の大変さが伝わってくる。高齢者は認知症高齢者と悪戦苦闘しながら介護をしている様子が伺える。一方、中年は認知症高齢者と距離を置きながら、介護をすすめている。若者は、コミュニケーションが困り、指示に従わない認知症高齢者に戸惑いが感じられる。

3. 認知症高齢者への対応

1) イメージした認知症高齢者

イメージした認知症高齢者の年齢を尋ねた(表5)。どの世代とも76～80歳が4～5割と多かった。その平均を見ると若者は77.3(±7.0)歳、中年は80.8(±5.6)歳、高齢者は81.8(±6.8)歳であった。高齢になるほど、イメージした年齢が高くなっている。

イメージした認知症高齢者の状況を尋ねた(表6)。イメージした認知症高齢者の状況は「2. 時折、会話が通じる」が約4割であった。次に多いのは「4. 会話が通じるが、時々チグハグする」であった。中年はそれに加えて「1. まったく会話が通じない」も多かった。

2) 認知症高齢者への対応について

虐待防止法は2006年4月から実施され、認知症高齢者ケアにおいても「身体拘束禁止」が浸透してきた^{注2)}。認知症高齢者の意思を無視したケアはいけない思いが、建前上、優位になっていると考えられる。そこで、本調査では本音を探る意図で、「しかたがない」、「中止する」など規制を容認した表現を取り入れた。日常的な対応17項目について尺度を作成した(表7)。

17項目の中で、規制容認傾向はあったのは、「4. 物をよく焦がすようになった認知症高齢者に対して火の取り扱いを中止させる。」、「15. 少し失認(場

表4 認知症高齢者を世話した中で、一番困ったこと

	記述内容
高齢者	<p>ほけた時 夜中に徘徊2人。夜中に徘徊して、2日間行方不明になり、警察に捜してもらった。夜中に外出し、ガスを使う。家に帰りたい。衣服を引き裂く。お風呂に入れて出すのに困った。外出が多くなった。紙おむつをしたりしたが、自分ではずす。尿失禁大便失禁には大変困った。離れてくれない。義歯が外れて飲み込みそうになり、喉の奥に引っ掛かっていた。会話が通じない3人。同じ事を何回も言う。相手の思いが通じない。お金がなくなる、ドロボーが入る、体のあちこちが痛いと言って訴えたとき。気が許せない。気を使ったこと。ストレス。その当時 (S57～60) 介護制度もなく、2人を1人で24時間365日見守ることは大変でした。交代する人が2～3人欲しいと思いました。病院への通院の交通手段、長時間の付き添いそれが当たり前の事かと思っていた。私は30代で主人の死別、姉・妹がなく、私一人の看病でした。子供二人を育てましたが、お嫁に行くし、私は仕事を持っていたので、仕事と看病で困りました。私も若かったので何とか母の世話ができました、でも地獄でした。</p>
中年	<p>夜間失見当。徘徊2人。どこでも尿失禁する。言う事を聞かない2人。作り話をする。警察に連絡すること、近所に家族の介護が全然ないと言いまわること。お金の問題 (〇〇さんととられたなどと言う)。金銭のトラブル3人。幻覚。急な精神的変化。精神の安定。常に不安がり、説明しても納得してもらえない。軽い認知症がある為、コミュニケーションがとれない時もあり、相手にストレスをかけないように接することが大変だった。話しのつじつまが合わない。被害妄想がひどく他人とトラブルになる。本人の自尊心を傷つけないようにお世話する。衣服の着脱。清潔。入浴。排泄4人。ストレス。安全を優先に考え行っったことが拘束、虐待とすぐに結びつけられない、国の定められた人員でケアをすると、人権を優先に考えてケアをするには限界がある。家に老人しかいないこと。自分がまだ学生で介護の知識がなかった。</p>
若者	<p>自分のことがわからない。物取られ妄想などで苦労した。言ったことをすぐに忘れる。同じ話を繰り返す2人。話を通じない3人。会話がときどき通じなくなる。会話が成立しない。少し理解しにくい。コミュニケーションがとれない。会話の内容。話を聞かない。声が大きいこと。自分一人でまだなんでもできると思っていたこと。その方の感情のコントロールがうまくいかず、他の利用者に攻撃的な言動、行動をされていたこと。いきなり怒りはじめる。考えていることがすぐ変わる。転落・徘徊。徘徊。深夜の徘徊。同じ場所にずっといることが出来ず、動き回ってしまうこと。排泄。1人でトイレができない、ご飯を食べてくれない。買い物。家族の説得。気持ちが届かなかったのがつらかった。その利用者の近親者が上司で、よく職員が関わる様子を見に来ていた。</p>

表5 イメージした認知症高齢者の年齢

年齢	平均 (S.D.)	～65	66～70	71～75	76～80	81～85	86～90	91～95	無答
若者 n=153	77.3 (7.0)	2.0%	3.3%	25.5%	52.9%	9.8%	7.8%	0.7%	1.3%
中年 n=150	80.8 (5.6)			10.7%	57.3%	17.3%	12.0%	1.3%	1.3%
高齢者 n=153	81.8 (6.8)	0.7%	0.7%	10.5%	41.2%	19.6%	20.3%	3.9%	3.9%

表6 イメージした認知症高齢者の状況

	1. まったく会話が通じない	2. 時折、会話が通じる	3. 会話が通じるが、大事なことは話せない	4. 会話が通じるが、時々チグハグする	無答
若者 n=153	16.4%	42.8%	15.1%	25.7%	
中年 n=150	21.3%	42.0%	12.0%	22.7%	2.0%
高齢者 n=153	15.2%	39.7%	15.9%	26.5%	2.6%

所がわからない) が見られる認知症高齢者には運転を中止させる。」「16. 火の管理ができなくなった場合、火の取り扱いを中止する」であった。反対に、規制反対は、「12. 認知症高齢者に病状や治療について説明をする必要はない」であった。生命に直結しない項目で、当然その立場に立ったとき十分理解はできないが説明はしてほしいと思っていることが

伺える。

項目に注目すると、火の取り扱いを中止や運転を中止に関しては、規制するべきであると考えている。本人のみならず周囲の安全確保の意図がうかがえる。病状や治療について認知症高齢者であろうとも説明に関してはすべきであると傾向がある。そこには、自分自身がその立場であったら、当然と考え

表7 認知症高齢者への対応

n=(若者 153. 中年 150. 高齢者 153)		1. 思う				2. どちらかと言えば思う		3. どちらかと言えば思わない		4. 思わない	
		1.	2.	3.	4.	無答	平均値	元	Bonferroni		
1. 話の途中からつじつまが合わなくなった時、話を中断するのはしかたがない。	若者	27.5%	47.1%	16.3%	8.5%	0.7%	2.05				
	中年	31.3%	46.0%	18.0%	4.7%		1.96	***	若・高***		
	高齢者	48.4%	35.3%	9.8%	5.2%	1.3%	1.69		中・高*		
2. 100円程度の買い物に1万円を出す(金の価値がよくわからない)認知症高齢者の買物を中止させる。	若者	19.0%	37.9%	27.5%	15.0%	0.7%	2.37				
	中年	18.7%	48.0%	22.7%	10.7%		2.25	***	若・高***		
	高齢者	44.4%	31.4%	14.4%	9.2%	0.7%	1.87		中・高***		
3. 認知症高齢者のプライバシー保持は難しい。	若者	20.9%	43.1%	25.5%	9.8%	0.7%	2.23				
	中年	21.3%	50.7%	16.7%	9.3%	2.0%	2.10	***	若・中**		
	高齢者	45.8%	36.6%	8.5%	8.5%	0.7%	1.78		中・高***		
4. 物をよく焦がすようになった認知症高齢者に対して火の取り扱いを中止させる。	若者	47.7%	30.7%	17.6%	3.9%		1.78				
	中年	54.7%	36.7%	4.7%	4.0%		1.58	***	若・高***		
	高齢者	68.6%	24.8%	3.3%	2.6%	0.7%	1.39				
5. 問題行動を起こす認知症高齢者をベッドから出さない。	若者	7.2%	27.5%	39.2%	26.1%		2.84		若・中**		
	中年	8.7%	38.0%	42.0%	10.7%	0.7%	2.53	***	若・高***		
	高齢者	22.2%	38.6%	23.5%	13.1%	2.6%	2.22		中・高**		
6. 近所から無断で物を持って帰る認知症高齢者の外出を中止させる(鍵をかける)。	若者	17.0%	35.9%	30.7%	16.3%		2.46		若・中**		
	中年	20.7%	48.0%	24.0%	6.7%	0.7%	2.15	***	若・高***		
	高齢者	37.3%	38.6%	15.7%	7.2%	1.3%	1.90				
7. 徘徊(意図もなく動き回る)のある高齢者に対して鍵をかけるのは当然である	若者	13.1%	34.6%	34.6%	17.6%		2.57		若・中***		
	中年	23.3%	47.3%	20.7%	8.7%		2.15	***	若・高***		
	高齢者	32.0%	41.2%	17.0%	8.5%	1.3%	1.99				
8. 徘徊や暴力をする高齢者は施設に入所させるのは当然である。	若者	10.5%	33.3%	43.1%	13.1%		2.59		若・中**		
	中年	12.0%	53.3%	30.0%	4.7%		2.27	***	若・高***		
	高齢者	39.2%	40.5%	13.1%	6.5%	0.7%	1.86		中・高**		
9. 暴力をふるう認知症高齢者を縛るのはしかたがない	若者	9.8%	33.3%	37.9%	17.6%	1.3%	2.61				
	中年	10.7%	34.0%	42.7%	12.0%	0.7%	2.55	***	若・高**		
	高齢者	24.2%	32.7%	27.5%	13.7%	2.0%	2.27		中・高*		
10. 点滴中の認知症高齢者は縛るのはしかたがない。	若者	11.8%	43.8%	30.7%	13.7%		2.46				
	中年	16.7%	48.7%	26.0%	8.0%	0.7%	2.24	***	若・高***		
	高齢者	42.5%	37.3%	13.1%	5.9%	1.3%	1.80PP		中・高***		
11. 安全が脅かされそうな(怪我・転倒・傷の悪化)場合、認知症高齢者を縛るのはしかたがない。	若者	18.3%	45.8%	25.5%	10.5%		2.28				
	中年	18.0%	48.0%	28.7%	4.7%	0.7%	2.19	***	若・高***		
	高齢者	40.5%	36.6%	14.4%	7.8%	0.7%	1.88		中・高**		
12. 認知症高齢者に病状や治療について説明をする必要はない	若者	5.2%	9.2%	30.7%	54.2%	0.7%	3.33		若・中*		
	中年	6.0%	20.0%	36.7%	36.7%	0.7%	3.03	***	若・高***		
	高齢者	20.9%	21.6%	26.1%	30.7%	0.7%	2.65		中・高**		
13. 認知症高齢者の貯金通帳・年金証書の管理を他の人がするのは当然である。	若者	19.6%	42.5%	27.5%	10.5%		2.29				
	中年	22.0%	52.7%	18.7%	6.0%	0.7%	2.07	***	若・高***		
	高齢者	46.4%	33.3%	10.5%	9.2%	0.7%	1.81		中・高*		
14. 認知症高齢者の不動産権利書の管理を他の人がするのは当然である。	若者	20.9%	43.8%	22.2%	13.1%		2.27				
	中年	21.3%	52.0%	19.3%	6.7%	0.7%	2.10	***	若・高***		
	高齢者	43.1%	37.9%	10.5%	7.2%	1.3%	1.79		中・高**		
15. 少し失認(場所がわからない)が見られる認知症高齢者には運転を中止させる。	若者	43.8%	36.6%	15.0%	4.6%		1.80		若・中***		
	中年	58.0%	35.3%	5.3%	0.7%	0.7%	1.47	***	若・高***		
	高齢者	69.9%	22.9%	2.6%	3.9%	0.7%	1.39				
16. 火の管理ができなくなった場合、火の取り扱いを中止する	若者	53.6%	34.6%	6.5%	4.6%	0.7%	1.61		若・中*		
	中年	68.7%	24.0%	4.0%	2.0%	1.3%	1.37	***	若・高**		
	高齢者	73.9%	19.6%	2.6%	3.3%	0.7%	1.34				
17. 夜間眠らない場合、睡眠薬を飲ませるのはしかたがない。	若者	13.7%	43.8%	28.8%	13.1%	0.7%	2.40				
	中年	9.3%	58.7%	24.7%	7.3%		2.30	***	若・高***		
	高齢者	42.5%	41.8%	10.5%	3.9%	1.3%	1.73		中・高***		

元：一元配置分析 * < .05 ** .01 < *** < .001

ていると思われる。

一元配置分散分析 (Bonferroni) を見ると、有意差は若者と高齢者で 17 項目すべてであった。さらに、若者と中年は 8 項目、中年と高齢者は 10 項目であった。三世代を比較すると平均値を比較では、17 項目すべてで若者が否定的な回答、すなわち規制反対、反対に高齢者は肯定的回答、すなわち規制容認で、中年はその中間的内容であった。

高齢者は他人に迷惑をかけるべきではない、社会規範は守るべきである思いが強いと考えられる。若者は今までの規範にとらわれず、自分がその立場になったときの思いが前面にでていていると考えられる。世代間とくに若者と高齢者の認識の差が大きい。他世代を理解して、接せることが必要である。

3) 認知症高齢者への対応と因子

認知症高齢者対応 17 項目を主因子 (プロマックス法) による因子分析を行った (表 8)。構成概念の妥当性 (KMO Kaiser-Meyer-Olkin) 0.88 で、さらに内容について検討をした。固有値 1 以上から 4 因子が抽出できた。累積寄与率は 58.8% であった。

命名を試み、信頼度係数 (α 係数) 調べた。その結果、4 因子「行動規制」0.80、「安全確保」0.78、

「日常ケア」0.71、「財産管理」0.90 であった。

4) 構造化による比較

各因子の全体での影響力をみるために、共分散構造分析 (Amos、最尤法) による構造化を試みた (図 1)。因子分析や回帰分析では定型的なモデルしか分析できないが、共分散構造分析は関係を自由に構築でき、複数変数間の因果関係が明らかできる。

〔行動規制〕、〔安全確保〕、〔日常ケア〕、〔財産管理〕を潜在変数とし、17 項目を観察変数で構造化した (図 1)。全体、高齢者、若者は C.R. が 1.96 以上であったが、中年はやや低かった。構造でも妥当性がやや低かった。中年は違った構造が考えられる。このたびは、比較のために同様の構造を採用した。

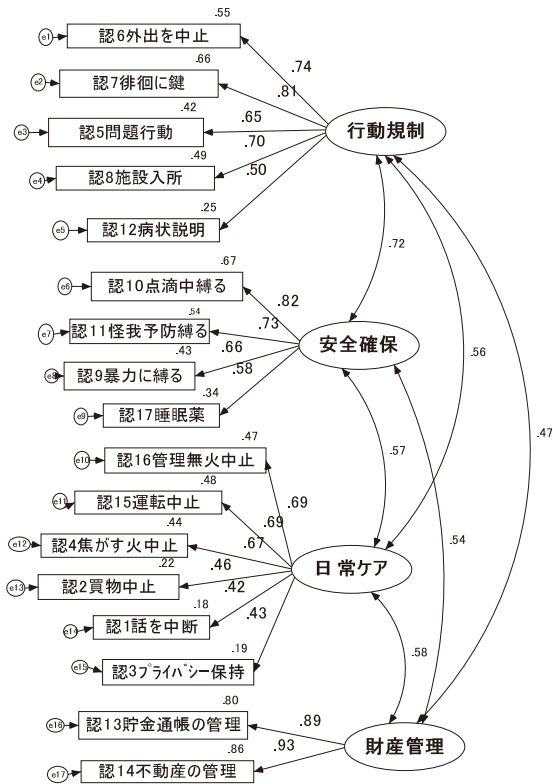
全体で標準化推定値が高いのは「13. 財産管理 (推定値; 高齢者 0.88, 中年 0.95, 若者 0.86, 平均値; 高齢者 1.81, 中年 2.07, 若者 2.29)」、 「14. 不動産管理 (推定値; 高齢者 0.87, 中年 0.94, 若者 0.94, 平均値; 高齢者 1.79, 中年 2.10, 若者 2.27)」であった。

他世代とくらべ高齢者で標準化推定値が高いのは、「10. 点滴中縛る (0.82)」、 「11. 怪我予防縛る (0.81)」、 「15. 運転中止 (0.83)」であった。

高齢者にくらべ中年・若者で標準化推定値が高い

表 8 「認知症高齢者への対応」の因子分析 (主因子法 バリマックス法)

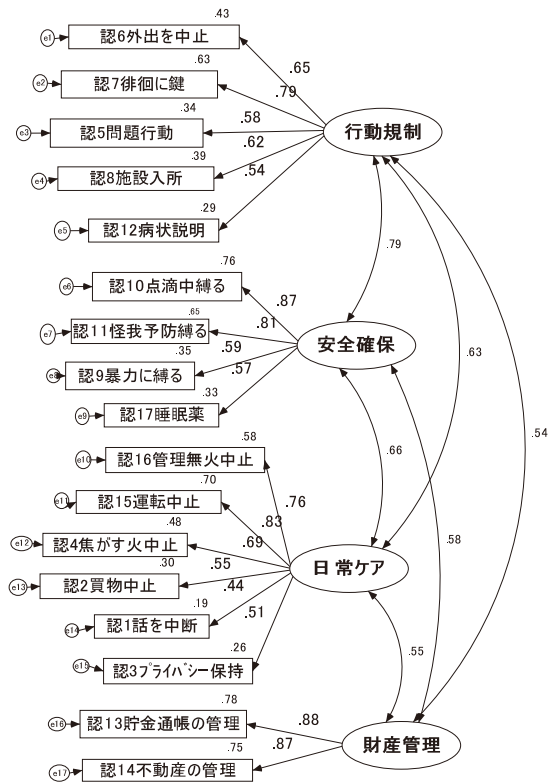
n=456 Kaiser-Meyer-Olkin (標本妥当性の測度 0.880)					
因子	1	2	3	4	命名 α 係数
認6 外出中止	.766	.128	.174	.084	行動規制 0.808
認7 徘徊に鍵	.703	.306	.164	.128	
認5 問題行動	.577	.302	.182	.019	
認8 施設入所	.510	.341	.243	.230	
認12 病状説明	.374	.311	.042	.220	
認10 点滴中縛る	.252	.725	.197	.184	安全確保 0.785
認11 怪我予防縛る	.205	.657	.183	.156	
認9 暴力に縛る	.294	.609	.058	.092	
認17 睡眠薬	.196	.429	.331	.156	
認16 管理無火中止	.024	.035	.802	.150	日常ケア 0.718
認15 運転中止	.111	.159	.636	.207	
認4 焦がす火中止	.238	.142	.599	.094	
認2 買物中止	.255	.177	.319	.117	
認1 話を中断	.217	.203	.299	.081	
認3 プライバシー保持	.187	.271	.281	.120	
認13 貯金通帳の管理	.155	.195	.255	.879	財産管理 0.905
認14 不動産の管理	.148	.239	.293	.777	
固有値	6.11	1.67	1.21	1.01	
累積寄与率%	35.9	45.8	52.9	58.8	



n = 456 C. R. > 1.96, CMIN/DF 2.95

GFIO. 91, AGFIO. 88, CFIO. 92, RMSEA 0.066 AIC 414.11

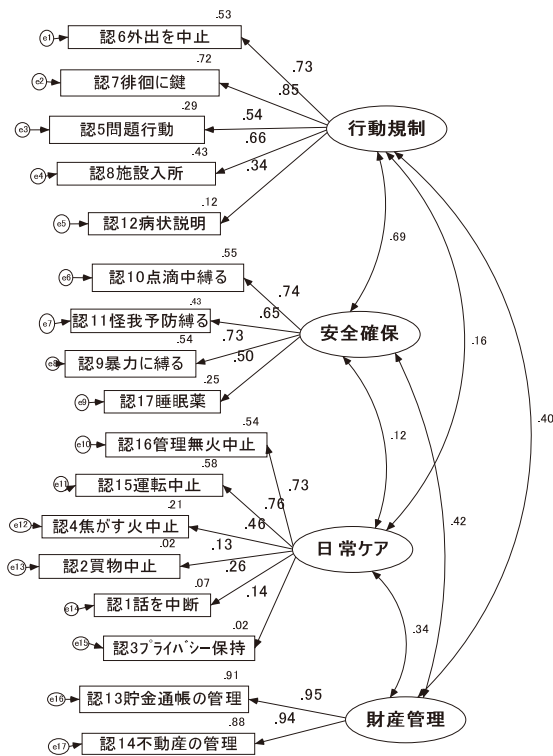
全体



n = 153 C. R. > 1.96, CMIN/DF 1.71

GFIO. 87, AGFIO. 82, CFIO. 92, RMSEA 0.68, AIC 273.4

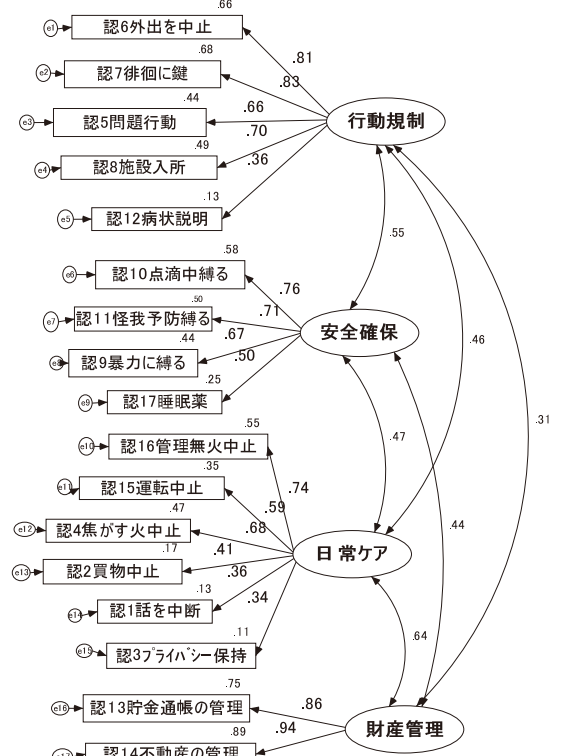
高齢者



n = 150, CMIN/DF 2.08

GFIO. 84, AGFIO. 78, CFIO. 85, RMSEA 0.066 AIC 315.1

中年



n = 153 C. R. > 1.96, CMIN/DF 1.80

GFIO. 86, AGFIO. 82, CFIO. 89, RMSEA 0.07, AIC 283.4

若者

図1 「認知症高齢者への対応」構造比較 (標準化推定値)

のは、「7. 徘徊に鍵（中年 0.85・若者 0.83）」、「6. 外出中止（若者 0.81）」であった。

高齢者のくらべ中年・高齢者で標準化推定値が低いのは、「1. 話を中断（中年 0.26・若者 0.36）」、「3. プライバシー保持（中 0.14年・若者 0.34）」、「認2 買物中止（中年 0.13）」であった。

考 察

2008年7月～9月に基本属性等と認知症高齢者に関する調査を実施し、三世代を比較、分析した。若者153人（平均年齢21.5歳±3.5）、中年150人（49.3歳±5.1）、高齢153人（74.9歳±5.6）から回答を得られた。

介護経験者は各世代約2～3割があり、三世代とも同じような介護傾向を示していた。しかし、高齢者は「トラブルがほとんどない」が53.5%で、反対に、若者は「トラブルが多い」が20.6%と多かった。高齢者の自由記載をみると大変な状況が記載されているが、上手に認知症高齢者と付きあっていたのではないかと考えられる。反対に、若者は認知症高齢者の行動に目くらまを立てながら接している様子が考えられる。

イメージした認知症高齢者を尋ねた。年齢はどの世代とも76～80歳が4～5割と多かった。状況は「2. 時折、会話が通じる」が約4割で、次に多いのは「4. 会話が通じるが、時々チグハグする」であった。

「認知症高齢者への対応」について、高齢者は17項目すべてで規制容認の傾向があった。他人に迷惑をかけたくない思いが考えられる。17項目は4因子に分かれ、構造化（標準化推定値）で比較した。

1) 認知症高齢者と財産管理

全体で標準化推定値が高い「13. 財産管理（推定値：高齢者 0.88, 中年 0.95, 若者 0.86, 平均値：高齢者 1.81, 中年 2.07, 若者 2.29）」、「14. 不動産管理（推定値：高齢者 0.87, 中年 0.94, 若者 0.94, 平均値：高齢者 1.79, 中年 2.10, 若者 2.27）」であった。

認知症高齢者の対応において、財産管理や不動産管理は影響力が大きかった。平均値から、高齢者は

他世代とくらべ規制を認める傾向が強い。特に中年で影響力が強いことから、心配していると考えられる。前回の三世代（2001年9月）の調査、「痴呆高齢者の尊厳に関する主要15項目」¹⁾でも、同様に影響力が強かった項目である。

他の病気などとは違い、認知症高齢者はお金の管理や不動産管理が十分ではなく、本人のみならず家族の生活基盤を揺るがす大きな経済問題である。そのために影響力がつよいと考えられる。しかし、1. 知っている1点～4. 知らない4点の4件法で尋ねた日常生活自立支援事業は高齢者 2.99 < 若者 3.18 < 中年 3.25 で、成年後見人制度の理解は若者 2.42 < 高齢者 2.86 < 中年 2.93) で、両者ともに理解が低い内容であった。残念ながらどの世代も十分制度を理解しているとは言えない。

2) 認知症高齢者と抑制

他世代とくらべ高齢者で標準化推定値が高いのは、「10. 点滴中縛る（0.82）」、「11. 怪我予防縛る（0.81）」、「15. 運転中止（0.83）」であった。

「点滴中縛る」、「怪我予防ために縛る」、「運転を中止」は影響力が強かった。いずれも規制容認傾向が強い。これらは生命に関係する項目である。高齢者は他世代にくらべ、命、生命に対して関心が高いと言える。規制を強要してでも、命を守りたい思いが強いと考えられる。

3) 認知症高齢者と隔離

高齢者にくらべ中年・若者の標準化推定値が高いのは、「7. 徘徊に鍵（中年 0.85・若者 0.83）」、「6. 外出中止（若者 0.81）」であった。

中年・若者は高齢者にくらべ「徘徊に鍵をかける」、「外出を防ぐため鍵をかける」に関して大きな影響力を持っていた。平均値をみると高齢者がトラブルを避けるために活動制限、規制容認傾向の強い傾向があった。体力が低下している高齢者にとって外出や徘徊は脅威と考えているのかもしれない。若者・中年は認知症高齢者の行動規制について関心をもっているが、高齢者ほど規制は考えていない。

4) 認知症高齢者の思いの尊重

高齢者のくらべ中年・若者が標準化推定値低いのは、「1. 話を中断 (中年 0.26・若者 0.36)」、「3. プライバシー保持 (中 0.14年・若者 0.34)」、「認2 買物中止 (中年 0.13)」であった。

高齢者のくらべ中年・若者が標準化推定値の低い項目は、「1. 話を中断」、「3. プライバシー保持」、「2. 買物中止」であった。中年・若者は日常的なできごとで、認知症高齢者であっても当たり前のことと捉えて意識していないと考えられる。

各年代の比較を試みた。他世代の認識を理解することは、エイジズムの予防、差別の予防^{5, 6)}につながっていくと考えられる。さらに、世代、認知症高齢者と一般化の認識を踏まえ、個々の認知症高齢者としっかり向き合うことが重要である。

結 論

2008年7月～9月に認知症高齢者に関する調査を実施、若者153人、中年150人、高齢153人を比較した。

1. 介護経験者は各世代約2～3割があり、三世代とも同じような介護傾向を示していた。しかし、高齢者は「トラブルがほとんどない」が53.5%で、反対に、若者は「トラブルが多い」が20.6%と多かった。高齢者の自由記載をみると大変な状況が記載されているが、回答から認知症高齢者と上手に付きあっていたのではないかと考えられる。反対に、若者は戸惑いの中、認知症高齢者の行動に目くじらを立てながら接している様子が考えられる。
2. イメージした認知症高齢者を尋ねた。年齢はどの世代とも76～80歳が4～5割と多かった。状況は「2. 時折、会話が通じる」が約4割で、次に多いのは「4. 会話が通じるが、時々チグハグする」であった。

「認知症高齢者への対応」について

3. 高齢者は17項目すべてで規制容認の傾向があった。他人に迷惑をかけたくない思いが考えられる。17項目は4因子に分かれ、構造化(標準化推定値)で比較した。

4. 「財産管理」や「不動産管理」で大きな影響力があった。特に中年で影響力が強い。認知症高齢者はお金の管理や不動産管理が十分ではなく、本人のみならず家族の生活基盤を揺るがす大きな経済問題であるためであると考えられる。

5. 高齢者は若者や中年にくらべ「点滴中縛る」、「怪我予防ために縛る」や「運転を中止」で大きな影響力があった。いずれも生命に関する項目である。高齢者は生命に対して関心が高いと言える。高齢者は規制を強要してでも、命を守りたい思いが強いと考えられる。

6. 若者や中年は高齢者にくらべ「徘徊に鍵をかける」や「外出を防ぐため鍵をかける」に関して大きな影響力があった。若者、中年は認知症高齢者の行動規制について関心が高いが、高齢者が思うほど規制しなくても良いと考えている。

Abstract

The investigation concerning the dementia elderly person was executed in 2008, and the young person, the middle age, and the elderly person were compared. For the dementia elderly person whom they had imaged with the third generation, the age was 76-80 years old (40-50 percent), "2. The conversation runs sometimes" was about 40 percent.

The elderly tended to regulation "Care on dementia elderly person", an item 17 all. "Care on dementia elderly person" divided into four factors was covariance structure analyzed, and the mean value and the influence (standardization estimation) were compared.

1. It had much sway in the third generation, "Property management", and "Control of real estate". The middle age's influence is especially strong. They are problems of shaking family's life base.

2. The elderly had much sway in "Bound to the drip straightening", "To prevent the injury, bind", and "Driving is discontinued" compared with the young and the middle age. Even if you restrict it, the elderly wants

to defend the life, and has the desire to which it wants to give priority to safety.

3. The young and the middle age had much sway "It locked wandering" and "To prevent going out, lock it" compared with the elderly. The young and the middle age think that you may be high the concern, and not restrict it from the elderly to the action restriction.

注1) 認知症サポーター 100万人キャラバン <http://www.caravanmate.com/contents.html>

注2) 高齢者虐待防止法（高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律）2005年11月成立。施行は2006年4月。発見者の通報義務、市町村に立ち入り権限有。

引用・参考文献

- 1) Emiko TANIDA, 2004, Comparison by "Main item concerning the elderly with dementia dignity" 20th International Conference of Alzheimer's Disease International Kyoto ; 194)
- 2) 谷田恵美子, 2003, ケアワーカーの「痴呆高齢者対応の基本姿勢」-構造化による比較-, 吉備国際大学大学院社会学研究科論叢 5号 ; 35-47.
- 3) 谷田恵美子・春木桂子, 2007, 高齢者の「認知症高齢者の対応」と「生活満足度」に関する認識の検討, 看護・保健科学研究 7 (2) ; 117-126.
- 4) 谷田恵美子, 2007, 「認知症高齢者対応」とケア-前期・後期高齢者の認識比較-, 吉備国際大学大学院社会学研究科論叢, 2006年8号 ; 55-65.
- 5) 谷田恵美子, 2008, 今求められる 新たな認知症高齢者ケア -社会的アプローチ-, p.86 ふうろう出版, 岡山.
- 6) 水津嘉克, 1996, 「社会相互における排除」, 『社会学評論』 47 (3) ; 335-349.

